# 日本史を彩った女性たち

## 第四回

## 「戦国の三賢夫人」

講談師　一龍斎貞花

女性の登用が叫ばれておりますところから、歴史上の女性を紹介しています。今回は、夫を出世させた戦国の三賢夫人をご紹介します。

豊臣秀吉の妻おねね。前田利家の妻まつ。山内一豊の妻千代。この三人が賢夫人といわれています。

大河ドラマや戦国のドラマによく登場するのが、豊臣秀吉の正室で通称北政所（きたのまんどころ）といわれたおねねさん。

織田信長の小者藤吉郎、上役の娘おねねを見初めて結婚。二人とも尾張中村の出身。声も大きく夫婦喧嘩も家来の前でもはばからず、尾張弁丸だしでやりあったという。寝所の睦ごとも百姓が怒鳴り合うようだったと書かれている書もあるが、聞いていたんですかね。

秀吉がどんどん出世したのちも、「おめえさん、それは違うがなも」と家来の前で。秀吉より北政所の意見の方が正しいと家来が納得したという。仲の良い夫婦だったが子どもないところから、二人の親類縁者を養子や家臣として育てる。有名なのが加藤清正と福島正則。正則は縁者の桶屋の倅といわれている。

秀吉が好色なので、信長に「亭主を叱ってやって下さい」と願い出ると、「秀吉には勿体ない程の妻なのだから、堂々と奥方として振る舞いなさい」と信長。

城主の秀吉が戦いのため度々不在。その間、おねねが家来や、その妻たちをきちんと指図して立派に留守を守る。

秀吉も側室淀君を寵愛しながらおねねさんには頭が上らなかった。おねねさんも側室が何人いても泰然としていたという。

淀君のわがままな振舞いにも平然として淀君の子秀頼を可愛がって育てたと申します。

秀吉が亡くなるや、秀吉を祀った豊国神社（京都市東山区）に度々参拝し菩提をとむらい剃髪し、朝廷から院号を賜り高台院と称し、高台寺を建て門前に屋敷を構え、徳川二代秀忠が度々その屋敷を訪れたと申します。淀君の専横つのり豊臣家の命運なきを悟ってか、子飼いの清正と正則に家康に従うよう進言したとも。側室淀君が面白くなかったかもしれません。おねねさんが子どもを産んでいたら豊臣は存続し日本の歴史も変っていたかもしれません。

### 前田利家の妻、おまつさん

大河ドラマの主人公にもなったまつ。信長の弓頭、篠原主計の娘で前田利家と結婚。利家が十阿弥という同朋を殺害し信長から怒りを受け、浪人中の利家を支え、その後美濃の長井甲斐守との戦いに功をあげ信長より許され帰参が叶い、前田家を相続。その後どんどん功を立て、金沢城主になった時、支城が敵に囲まれ利家自ら救援に駆けつけようとするものの、支城は破られる状態で家来の士気が一向に上がらない。この時まつはへそくりの砂金を出し、

「これで兵に英気をつけ、武器を揃えて下さい」これによって士気が上がり勝利。

秀吉と柴田勝家の戦いの時、利家は勝家の配下。秀吉とは青年時代からの友人、出陣するも病気と称して帰城。

まつは、昔なじみのおねねに昔のよしみよろしくとお願いしていた。秀吉も

勝家に勝利後、利家を敵にする気なく利家夫妻の恭順ぶりに、加賀の国を与えて百万石。

秀吉朝鮮出兵の時、利家も名護屋城（佐賀）へ。秀吉から妻や側室を陣中見舞いに呼んでいいといわれた時、

「夫の留守を守らなければいけませんし、もう歳ですから」と、若い側室を夜伽に送り、この側室が産んだのが三大名君利常。

利家没後、関ヶ原合戦前関西方へ味方しようかという姿勢のみえる、二代利長が家康から疑いを受けるや、時代の流れを読み自ら人質として江戸へ。

「私はもう年寄りだから心配するな、人質として行くからには覚悟している。武士はどんなことがあっても家を存続することが第一です」と。利家とまつは47・8まで手を握って寝ていたといいます。その気になった時だけでなく日頃手を取り合って寝ていた。実に夫婦円満だったんですね。

## 山内一豊の妻　お千代さん

一豊は、岩倉織田家の家老の倅。一門の信長に攻められ父は討死。2人の家来に守られて仕官先を求めて転々。母親は暮らしのため裁縫を教えていた。習いに来ていた娘の中で気の利くいい娘。この娘ならと母親が見初めて千代を結婚させたという説もある。

名馬を買うことの出来ない夫のため鏡の中からへそくりを出して名馬を購入。お城普請監督の際、人夫達に料理を振舞うため自分の黒髪を売って金を工面。唐織の小切れで縫った小袖をねね他に進上。今日のキルトと同じ。

上役の奥さんへのプレゼントは夫のためでもあります。地震で娘を亡くすや側女をと勧めるも、利家と違って断った一豊。利家の側女は名君を産み、断った一豊は子に恵まれず甥を養子にした。秀吉のように女性好きはともかく、側室を持つのは後継者をつくる大義があったんです。今は駄目ですよ。

家康の上杉征伐に従った夫のもとへ石田三成挙兵の報せ。もしもを考え使者3人の笠の紐の中に3分割した手紙を。そして「私のことは心配しないで家康公にお味方を」と、時代の流れを読み切ったお千代さん。「私の掛川城差し上げます。ご自由にお使い下さい」と言った一豊の言葉もあり、家康は土佐24万石を与えている。高知城表門を入ってすぐ一豊夫婦と名馬の銅像が建てられている。大徳寺塔頭大通院に夫婦の石塔があり、「奥さんの石塔が5㎝高いのに気が付きましたか」とある人から。「気が付きませんでした、何故ですか」「かかあ天下だから」と冗談を言われた。勿論同じ高さです。

流石賢夫人といわれる3人でしょ。へそくりを出したり、私のことは心配するな、まつさん千代さん似ていますが、ねねも千代も後継者を産めなかったのに対し、まつは後継者をもうける対策を。亭主の尻を叩いた千代と違って優しいまつ、私はこのおまつさんが3人の中で一番と思っています。

明智光秀は、斎藤道三の家臣妻木家の長女との縁談、親同士が決めた縁談でしたがお互いに気に入り婚礼を待つばかり。ところが熙子（ひろこ）が疱瘡にかかり美しい顔にあばたが出来てしまった。申し訳なく思った父親が熙子の妹を嫁がせようとしたが、光秀は「人の容姿は変っても心の美しさは生涯変らぬものです」と熙子を妻に。これを聞いて熙子は嬉し涙を流します。その後明智城落城、光秀と熙子は幼い二人の子を抱えて6年間諸国を流浪。熙子は縫物をしたり商家の子守りや手伝いをして浪人の夫を支えます。細川ガラシャは娘です。

そんなある日、連歌の催しを開く機会を得、そこで熙子は自分の髪の毛を売って接待の費用を工面、この連歌の会がきっかけとなり、鉄砲の腕を披露して越前朝倉家に仕官。その後信長に仕えどんどん出世して織田家で城持ち第一号に。その後光秀が信長に謀反を起した本能寺の変。反逆しなかったら、そして夫の謀反を止めていたなら熙子も賢夫人の仲間入り出来たんでしょうが。光秀は側室を持たず戦国時代には珍しい愛妻家。夫光秀が敗れたと知るや、熙子は坂本城の金庫、倉庫を開き生き残った家臣に総てを分配して城を退去させると、自害して夫のあとを追いました。この時46歳、戦乱の世をかけ抜けたおしどり夫婦でしたが、光秀は謀反を起したため一筋に愛した糟糠（そうこう）の妻の賢夫人の称号を奪ってしまったともいえますね。矢張り夫婦は一体、結果が大切です。

「女房の尻に敷かれていれば間違いない」という人もあります。これも名言かもしれませんね。夫を支えこれに応えて出世した夫。

いい奥さんに恵まれたいですね。だからと言ってくれぐれも奥さんに三賢夫人を見習えと仰らないで下さいよ。